巻頭言

これからのNICU看護

北里大学病院　入江　暁子

赤ちゃんの看護の可能性に引かれNICUで仕事をするようになって10年以上になります．当初は，吸引圧はどれぐらいか，吸引の方法は，挿管チューブを抜かないように固定するにはどんな方法が良いかなど，ケア技術の改善・改良に努力していたように思います．このことは，障害を残さないように赤ちゃんを助けたい，すなわち“intact survival”を第一の目標にしてきたNICUの看護がありました．1人でも多くの赤ちゃんを助けたい．障害を残さず助けたい．この思いは，NICUで働いている限り職種を問わず変わることはありませんし，この強い思い，熱き情熱があったればこそNICUの医療技術はめざましく進歩してきたといえます．新生児医療の進歩に加え胎児管理あるいは出生前診断の進歩により，世界一低い新生児死亡率を誇るまでになりました．それに伴い1,000g未満の超低出生体重児や先天異常児がNICUに長期に滞在するようになり，看護者に求められる能力も大きく変化してきています．

救命を第一として発展してきたNICUから，集中治療を受けながらもより良い成長・発達へのケアを考えなければならない長期入院児の増加，家族への早期からの介入も含め，退院後の母子関係を考えたフォローアップ体制の整備など，NICUの医療が大きく変化してきています．すなわち，赤ちゃんを取り巻く総ての人的，物的環境への取り組みが話題となり，人間的環境への見直しが重要視されるようになってきました．

これからのNICU看護は，救命は当然のことながら救命と同時に非侵襲的ケア“non invasive care”の提供を推進していくことだと考えます．出生直後からNICUは赤ちゃんの療育の場ととらえ，赤ちゃんたちにとって快適に過ごせる環境を提供していくことや赤ちゃんの行動や反応からストレスを読み取り判断する能力が要求されます．また，赤ちゃんの痛みについても「赤ちゃんは痛みを覚えていない」などと，まだまだ誤った神話がまかり通っているのが現状です．赤ちゃんの側に24時間いる看護者は，新たな知識を吸収することや技術を駆使して赤ちゃんにとって何がストレスなのかを理解しストレスを最小限にする看護ケアの提供が，今強く求められています．今まさに脚光を浴びている“developmental care”（早期未熟児の発達発育を疎外する因子を除き，赤ちゃんの発達を促す支援）を科学的な根拠に基づいて実践していくことです．

赤ちゃんの思いを一番わかっているのは両親と看護者です．赤ちゃんの環境を整え，赤ちゃんがより良く成長・発達していくために，優しい看護，優しい育児を両親とともに考えられるNICUになることを願っています．